４　東日本大震災被災地視察報告

平成２６年７月２６日から２８日まで、教職員２名、生徒２名で宮城県気仙沼市から岩手県陸前高田市を訪問した。目的は、実際に現地を歩き、被災された方と語ることで得たものを本校の防災教育に役立てることである。

現地では、復興語り部ガイドの方に案内していただき、震災地のその後を視察した。そこで見聞きしたこと、感じたことを実際に現地に行った生徒２名が自分達の言葉でまとめ、平成２６年９月１０日の臼高祭（文化祭）及び平成２７年２月２日の公開研究発表会で発表した。

以下のプレゼンテーションは、その時のものである。

被災地を訪問して学んだこと

～マイナスをプラスに～

東日本大震災被災地視察

大分県立臼杵高等学校
川野 奈々　川野七星

私たちは、７月２６日～２８日の３日間、東日本大震災の被災地視察に行ってきました。

1

私たちが通っている臼杵高校は海抜０メートルの場所に位置し、今年度、文部科学省の防災教育モデル実践校の指定を受けています。

臼杵市総合防災訓練リーダー会議の様子

2

この写真は、臼杵市総合防災訓練に向けて、会議を行った際の写真です。今回の被災地視察は防災教育の一環として、実際に足を運び、防災に対する意識を高め、教訓から様々なことを学ぶ目的で行ったものです。

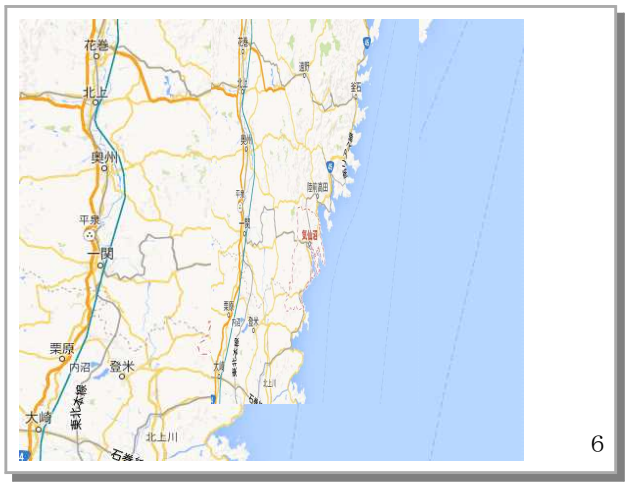
宮城県気仙沼市
～人口～
＜震災前＞ 73000人
＜震災後＞ 67856人
（-5144人）

3

私たちが訪れた気仙沼市は、人口は臼杵市の約２倍の６７，８５６人で被災前は７３，０００人と、今より約５，０００人も多くの人が住んでいました。

仕事をする８割の人が、水産関係の仕事をしている三陸地方を代表する漁師町です。

臼杵から気仙沼市までの直線距離は、１，１００キロメートル。



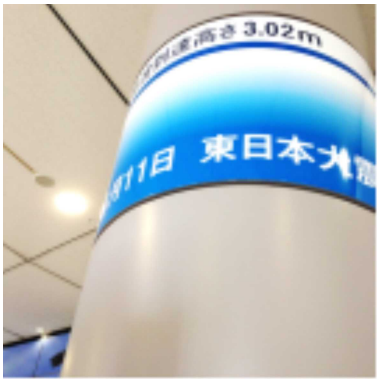
その周辺の地形はリアス式海岸で、津波の際には四方八方から何重にも津波が押し寄せてくる地形です。

私たちの住む臼杵、津久見、佐伯も似たような地形をしています。

１日目は臼杵から宮城県気仙沼市まで特急電車や飛行機、新幹線などを利用して移動をしました。

仙台空港では、東日本大震災に関する展示物があったものの、完全に修復されており、被災した空港には見えませんでした。

津波到達高さを表す柱



10

空港の大きな柱には津波の到達した高さを表す印が付けられていました。

表示看板が何メートルを指しているかご覧になれますか？柱には３．０２メートルと書いてあります。

11

実際に柱の前に立った私たちと比べてみると、３．０２メートルがどれくらいの高さなのか想像できると思います。

12

１日目の夜ご飯は復興屋台村に行きました。

気仙沼横丁での出会い

13

ここは津波で自分のお店が流された飲食店の方々が復興を目指し集まっている屋台村です。

そこで偶然、佐伯市出身の方に出会いました。写真のダブルピースをしている人です。この方は臼杵市にある現在の津久見高校海洋科学校の前身の海洋科学高校出身で、復興のために出稼ぎに来ていました。

「足りないのは重機ではなく人、とにかく人手が足りない」

14

視察に行くまでは、２０２０年開催の東京オリンピックに向けて、資材や重機が東北ではなく東京に集まっていると聞いていましたが、その方は「足りないのは重機ではなく人、とにかく人手が足りない」…これが被災地で働く人の声でした。

２日目は、東日本大震災の被災地視察。語り部さんの協力のもとでの被災地視察でした。

今回､語り部さんとして協力してくれたのは、現在３人のお子さんを育てている垣下美紀さん。垣下さんも気仙沼で被災した一人でした。

彼女は、仕事中に被災し、一度自宅に戻り必要なものを持って避難しようとしたのですが、乗ってはいけない車に乗ったため、道路は大渋滞しておりなかなか進めませんでした。ふと横を見ると、海の水は引いた状態で明らかに普段と違った様子に、危機感を感じました。垣下さんは急いで車から降りて山に避難しました。

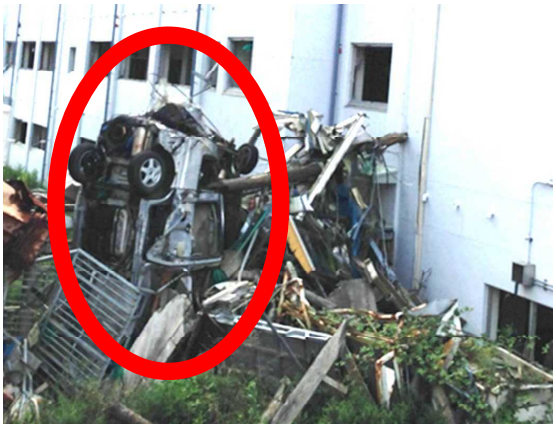
そして、垣下さんが山に逃げて約５分後に津波が来たそうです。そのあと２日間で７回の津波が押し寄せ、その２日間、水が引かなかったそうです。垣下さんの語る状況は、テレビで語られる以上のものでした。

まず私たちが訪れたのは、気仙沼向洋高校。津久見高校海洋科学校のような水産高校です。

この写真は何だと思いますか？

実は体育館です。屋根の部分が津波で流されています。校舎の窓ガラスは、津波によって壊され、校舎内は、当時のままで、足の踏み場もないほどものが散乱していました。

校舎横に積み上がっているものは、津波によって流されてきたものです。



20

よく見てみると頭から突っ込んでいる車や木などさまざまなものが積み上がっており、津波のエネルギーの強さを物語っています。

21

写真右下の校舎は３階まで窓ガラスが全て壊されています。このことから、この場所の津波の到達した高さは、校舎３回に相当する高さだったことがわかります。

実際に被害を受けた高校を目の当たりして、将来、臼杵にも津波が来た時海抜０メートルにある臼杵高校はどうなってしまうのかと、不安や恐怖を感じました。

杉ノ下地区 ＜気仙沼市＞

22

次に私たちが訪れたのは、杉ノ下地区という住んでいた方の無念さが残る場所です。

東日本大震災の慰霊碑

23

ここは市の避難場所に指定されており、東日本大震災の時にもお年寄り中心にたくさんの人が、避難していました。それにも関わらず、津波が押し寄せ９３名の尊い命が失われてしまいました。ここでは今でも毎月１１日に捜索活動が行われています。

絆

あなたを忘れない
『ここにいれば大丈夫だ』
しかし、無情にも第一波で
下手から家や車が押し寄せ
そして、第二波、第三波が…
九十三名の尊い命と
すべての財産が海へと散った
あの一声が無上の叫びに
私たちはあなたを忘れない
今までありがとう
こころやすらかに

杉ノ下地区民一同

24

助かることができると信じて、波に呑まれていった犠牲者の無念さが伝わる慰霊碑です。

これは高台から見た気仙沼市の風景です。右側の写真を見てみると津波によって建物がなくなっている様子がよくわかります。

語り部の垣下さんによると、防潮堤を作ろうとすると防潮堤に囲まれ、まるで檻の中にいるような気分になるために、防潮堤を作ることを反対する人がいるそうです。

そのために防潮堤はできず、それが決まらないために道路が決まらない、道路が決まらないために家が建てられないため、復興は全く進んでないとおっしゃっていました。

また、道路が決まってない場所があるために震災後どこが通れて、どこが通れないのかがよくわからないと、被災した方にしかわからない悩みも語って下さいました。

次に私たちが訪れたのは、岩手県陸前高田市にある奇跡の一本松です。

陸前高田市は総人口１９，３８２人、被災前は２３，３００人でした。三陸沖に面した岩手県の最も南にある市で宮城県の気仙沼市から車で３０分とそんなに離れてはいませんでした。

29

しかし、被害の状況は気仙沼とは格段の差があり、奇跡の一本松がなぜ「奇跡」と言われているのかという理由がよくわかりました。

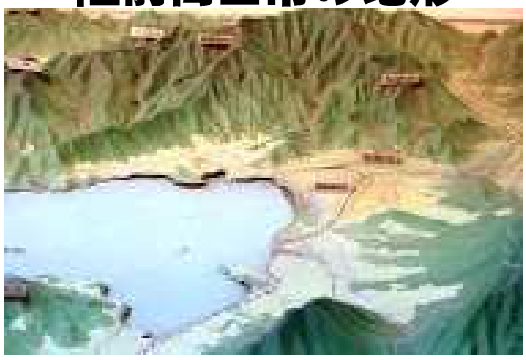
私たちが訪れたこの日もたくさんの方々が、奇跡の一本松を見るために来ていました。

震災前 ⇨ 震災後

30

震災前は７万本もの立派な松林でした。右側の写真を見てみるとその差は歴然です。津波の威力がどれほど大きいものかが伺えます。

陸前高田市の地形



31

陸前高田市に大きな被害をもたらした原因は地形にありました。

32

気仙沼市は手前に大島があり、大島がたてとなって津波の威力を弱めることができました。ところが、陸前高田市は写真のように、津波のエネルギーを弱めるものがないだけでなく、さらに入り組んだ地形のために、周辺の波が集まってしまったことで、より甚大な被害に遭いました。

陸前高田市の風景

33

これが陸前高田市の風景です。

住宅も建物もなく、私たちの目に映ったのは、積み上げられた土や作業用のトラックと、かさ上げ用の土を運ぶ巨大なベルトコンベアがあるだけの街。車から降りると息もできないほど砂煙が舞う街でした。この一日で見たもの聞いたことはすべてが心に響きました。

それと同時に私たちが思っていたほど、復興が進んでいない場所が多く、何もない街を目の当たりにした私たちは、言葉を失ってしまいました。

最後に、唐桑半島ビジターセンターに行きました。

ビジターセンターは、今から約５０年前のチリ地震の時の大津波の恐怖を忘れないために、床の振動や風などを再現する、当時の技術で作った日本初の津波体験施設です。

小さな子供にもわかる防災教育を重視した内容であり、私たちが訪れた時、映像には東日本大震災の映像も映し出されていました。

他にも、江戸時代に描かれた被災の絵や津波のメカニズムを学習できる装置もあり、第一波より第二波の方が威力が強いことが分かりました。

チリ地震の時の津波の怖さを忘れないため、また皆に知らせるために３０年以上前に作られたビジターセンターです。

こんな施設が近くにあるのに、人々は怖さを忘れてしまい、東日本大震災でも多くの人が被害に遭っています。大事なことは、人に受け継いでいかなければ忘れてしまい、大きな被害に遭うという繰り返しになるということがよくわかりました。

＜3日目＞移動（気仙沼～臼杵）

38

３日目、気仙沼市を後にし、私たちは、臼杵に向けて出発しました。

39

今回の被災地視察で生の声を聞いたことは私たちにとって貴重な忘れられない経験となりました。

大事なこと　それは・・・

地域との繋がり

家庭や学校での約束事

人と人との絆

40

個人個人の防災意識を高めることも必要だが、実際に被災して感じたことは、地域とのつながりや、保護者同士のつながり、ルールをきちんと決めることだと語り部の垣下さんはおっしゃっていました。

ルールというのは、各家庭のルールだけではなく、学校側もルールを決め、きちんと保護者の方に知らせることが大切で、実際に垣下さんもある一定の震度の地震が来た時には、下校させないという紙をもらったそうです。

震災から来月で４年

２０１１．３．１１

１４２４日が経過

２０１５．２．２

41

来月には、震災から４年を迎えようとしています。

42

しかし、場所によっては向洋高校のようにがれきがそのままになっているところや、陸前高田市のように復興が進んでいないところもあります。

津波が残した爪痕を目の当たりにし驚きましたが、それ以上に人々に残る心の爪痕に悲しくなりました。

43

今なお、地震のたびに当時のことを思い出し、津波によって水に対する恐怖心からお風呂に入るのが怖いなど、心に傷を負った人も多いそうです。

また家庭によって被害が違うため、家が被災していないことで、いじめにあった子もいたそうです。それは子供に限った話ではなく、垣下さんの友人も震災の前後で人が変わっていったそうです。

家が壊されていくことよりも

人の心が

壊されていくことの方が辛い

44

家が壊されていくことよりも、人の心が壊されていくことのほうが辛い。

45

４年が経とうとしている今でも、辛い思いをしている人がいることを知りました。

小学校１年生が書いた願い

46

他にも垣下さんの話の中に、小学校１年生の息子のクラスで、七夕イベントの際、それぞれ願い事を短冊に書いたそうです。

みなさんも小学１年生が書く願い事はプロ野球選手や、ケーキ屋さんなどの将来なりたい職業などを思い浮かべると思います。しかし目を引く短冊がひとつありました。なんだと思いますか？

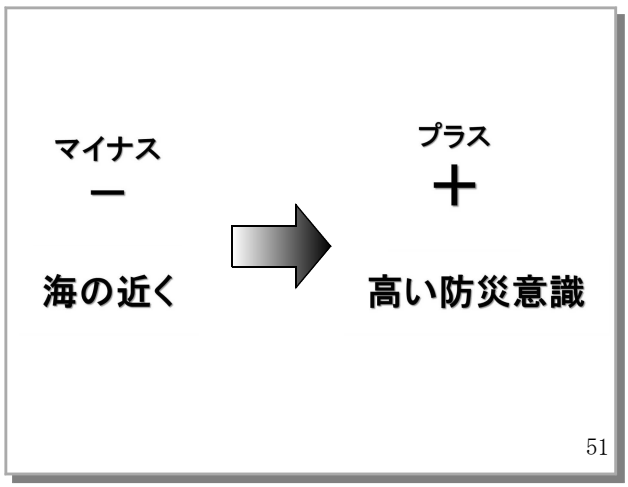
「一生生きる」…この子供は難病を患っているわけではないそうです。東日本大震災があって命の重みを感じたのかこう書いてありました。小さい子供から見た津波は海からやってくるモンスターにみえるそうです。小さい子供にまで強い影響を与えたことがわかります。

今回、私たちが学んだ教訓を少しでも臼杵高校の生徒をはじめ、いろいろな方々に知ってもらい、災害時に活かしてもらえるようにすることが私たちの役目です。

自分たちがどのようにして、山と海に囲まれた臼杵の地で生きていくかを考えることが一番大切だと感じました。

先程スライドで見せた向洋高校さんの報告書によると、海の近くの学校でありながら、校舎は壊されたものの、生徒、教職員を含めなんと犠牲者は一人も出ませんでした。

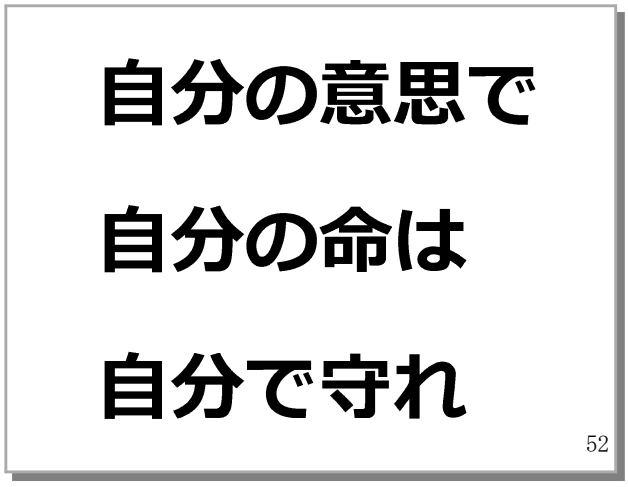
犠牲者が一人も出なかった一番の要因は、意外にも学校が海の近くであったからだそうです。海の近くであったからこそ訓練に真剣に取り組み、防災に対する意識を高くもっていたそうです。



私たちもこれからの訓練を真剣に取り組み防災に対する意識を高めることが重要です。

海の近くというマイナスやハンデを防災を意識する機会が増えるというプラスやチャンスに変える！

このことで命を守ることができると思います。



今回行った視察の中で、語り部の垣下さんがおっしゃった、「自分の意志で自分の命は自分で守れ！」という言葉が一番強く心に響いています。

この言葉を胸に刻んで、これからの日々を過ごしていきたいと思います。

以上で被災地視察の報告を終了したいと思います。

ご清聴ありがとうございました。